

令和 6 年 6 月 1 7 日現在

機関番号：33704

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K14173

研究課題名（和文）中学生の悩み及び相談行動の価値・コスト認知に及ぼす教師の働きかけの効果の検討

研究課題名（英文）Effect of Teachers' Practice of Encouraging Questions and Help-seeking,
Subjective Experience in Being Worried and Anticipated Costs and Benefits on
Help-seeking: Junior high school students

研究代表者

後藤 綾文（Goto, Ayafumi）

岐阜聖徳学園大学・教育学部・准教授

研究者番号：90708447

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、教師への相談及び生徒同士の相談を促す教師の働きかけが、生徒の相談行動に対する価値・コスト認知と悩むこと自体への価値・コスト認知を介して、相談行動が促進される影響過程を明らかにすることであった。教師への相談を促す働きかけや生徒同士の相談を促す働きかけが、悩むこと自体への価値認知と相談行動の価値認知を高め、相談行動のコスト認知を低めることを明らかにした。相談行動の価値認知と教師への相談および生徒同士の相談を促す働きかけが自律的な相談行動を促進することも示された。教師の日常的な関わりが、生徒自身の悩みへの向き合い方や相談行動に対する考え方も適応的なものにする事が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、教師への相談行動を促す働きかけと生徒間の相談を促す働きかけが、生徒の相談に対する意識をより肯定的なものとし、相談行動を促進させることに着目した研究は国内外で見当たらない先進的な研究である。教師の働きかけとは、授業や学校生活の中で教師が生徒個人に声かけをしたり、学級全体に伝えたりする具体的な行動や応答を取り上げている。生徒に悩みや問題を解決することの価値や相談行動を選択することの価値を教師が日常的に高めることにより、自殺や悪質ないじめという緊急事態に至るまえに生徒からの相談を受けることができ早期対応が可能となると考えられる。

研究成果の概要（英文）： The purpose of present study was to examine the relations between teachers' practice of encouraging questioning and help-seeking and subjective experience in being worried, anticipated costs and benefits on help-seeking, and students' independent and dependent help-seeking from teachers and classmates. An online survey was conducted among junior high school students at their class. The results of structural equation modeling indicated that (a) a high level of teachers' practice related a high level of the benefits of help-seeking and subjective experience in being worried, and a low level of the costs of help-seeking, (b) the teachers' practice and benefits on help-seeking was related to the students' independent help-seeking from teachers and classmates.

研究分野：臨床心理学、教育心理学

キーワード：相談行動 援助要請 教師の働きかけ 価値・コスト

1. 研究開始当初の背景

2018年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」では、中学校において不登校生徒が108,999人となっており、在籍者数に占める割合は3.25%であると報告されている(文部科学省, 2018)。不登校の理由として「『学校における人間関係』に課題を抱えている」という回答項目があり、なかでも「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が71.2%と突出している。これはどの生徒も抱えやすい悩みであるため、悩みを抱えた生徒たちをチーム学校として対応することが喫緊の課題といえる。

相談行動の中でも学習面については、授業中における教師への相談(質問)を促す教師の働きかけが相談(質問)意欲を高めることがいくつかの研究で指摘されている(Butler & Shibaz, 2008; 2014)。さらに、教師が生徒に対して情緒的で支援的な働きかけをしている学級では、教師をモデルとして生徒たちが他生徒に同様の行動をとることが示され始めている(Gest & Rodkin, 2011; Luckner & Pianta, 2011)。これらの研究をふまえ、中学生の相談行動を促すためには、自身の相談行動に対して受容的、肯定的な他者や環境の存在が重要な要因であると考えられる。

本研究では、中学生が相談しやすい環境を考えていくため、彼らにとって身近な学級に関わる社会的要因に焦点を当てることとする。これまでに教師への相談を促す教師の働きかけと生徒同士の相談を促す教師の働きかけを捉える尺度を開発し、教師の働きかけがそれぞれ教師及び他生徒への相談意欲を高めることを明らかにしてきたが、さらに他者に自律的あるいは依存的な相談行動のどちらを促進するのかを検討する。相談を促す教師の働きかけは、相談行動に関わる生徒の意識を変容させることができるのか、この点についても検討を加える。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は、教師への相談及び生徒同士の相談を促す教師の働きかけが、生徒個人の相談行動に対する価値・コスト認知と悩みや問題解決に対する価値・コスト認知を介して、相談行動が促進される影響過程を明らかにすることである。

先行研究では、相談行動を促進する個人の内的要因として、相談行動に対する価値・コスト認知の重要性が指摘されている。相談行動に対する価値認知が相談意欲を高め、相談行動に対するコスト認知が相談意欲を低めることが示されている(e.g., 永井・新井, 2007; Vogel et al., 2005)。教師への相談及び生徒同士の相談を促す教師の働きかけの有効性を示すために、まず相談行動に対する価値・コスト認知との関連を確認する必要があると考える。さらに、そもそも悩みや問題解決に対するコスト認知が高いために、相談行動に至らない者の存在が考えられる。教師への相談及び生徒同士の相談を促す教師の働きかけと悩みや問題解決に対する価値・コスト認知との関連についても明らかにする。

3. 研究の方法

コロナ禍での調査ということで、研究開始以前・当初の目的を一部変更しなければならなかったため、方法についても変更点がいくつかあった。

研究1では、中学生のクラスメイトへの相談意欲への影響に焦点を当てて、研究を進めることになった。中学生にとっては友人の影響が大きいいため、友人ネットワークと相談意欲との関連を検討するべく、質問紙調査を行った。複数校の調査協力校と打ち合わせを重ね、生徒たちのメンタルヘルスについても調査も行った。

研究2では、研究計画の一部を変更し、研究テーマである相談行動と教師の働きかけについて、家族関係との関連を合わせて検討するため、小学生を対象に質問紙調査を行った。

研究3では、中学生を対象に、教師への相談を促す働きかけと生徒同士の相談を促す働きかけ、相談に対する認知と悩むこと自体への認知、および相談行動との関連を検討するため、各自のタブレットを使用してのオンライン調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 研究1

コロナ禍での調査ということで、複数校の調査協力校と打ち合わせを重ね、本年度はまずクラスメイトへの相談意欲への影響に焦点を当て、研究を進めることになった。中学生にとっては友人の影響が大きいいため、学習活動を共に行う友人ネットワークと親しい友人ネットワークを尋ね、友人ネットワークと相談意欲との関連に着目することとなった。ただし、コロナ禍のため、学校限からはメンタルヘルスの把握と助言が求められたため、メンタルヘルスについても調査を行った。メンタルヘルスについては、PSI(パブリックヘルスリサーチセンター版ストレスインベントリー)を用いた結果、学年の30%前後が身体的藩王、抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無気力

の高い状態にあることが示され、1年間を通してコンサルテーションを行った。なお、質問紙調査については、友人ネットワークを尋ねることへの配慮と生徒が簡便に回答するための準備、友人ネットワークデータの入力・管理などに過重な負担がかかり、データ分析はいまだ継続中の段階である。

(2) 研究2

コロナウイルス感染拡大の余波を受け、家庭の収入の減少などによる子どもたちに対する家庭の影響がより議論されるようになっている。研究計画の一部を変更し、研究テーマである相談行動と教師の働きかけについて、家族関係との関連を合わせて検討する研究を実施した。家庭の影響と教師の影響をともに受けやすく、家庭の養育についての回答に抵抗を持ちにくい小学生を対象として、家族関係と援助要請との関連を検討した。

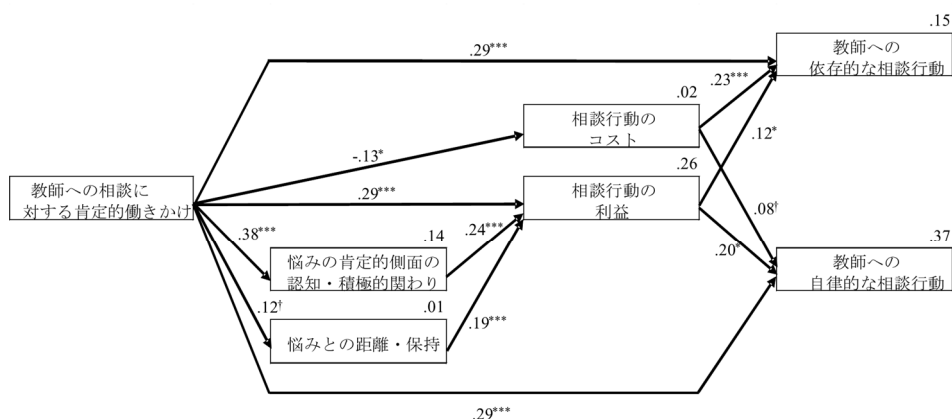
子どもの相談スキルは、保護者の受容的な養育態度、保護者の統制的な養育態度、友人関係に対する自信、教師への相談を促す働きかけによって高まることが示された。また、保護者の受容的な養育態度を低く感じている子どもでも、教師への相談を促す働きかけを感じているほど相談スキルが高まるとも示された。

(3) 研究3

教師の働きかけが悩み体験の仕方と援助要請の利益・コスト、自律的な相談行動および依存的な相談行動に及ぼす影響を検討した。具体的には、教師への相談を促す肯定的働きかけが教師への相談行動に直接的に影響を及ぼすこと、生徒間の相談を促す肯定的働きかけがクラスメイトへの相談行動に直接的に影響を及ぼすこと、2つの働きかけが悩みの体験の仕方と相談行動の利益・コスト認知を介して教師への相談行動およびクラスメイトへの相談行動にそれぞれ影響を及ぼすことを想定し、仮説モデルを設定した。

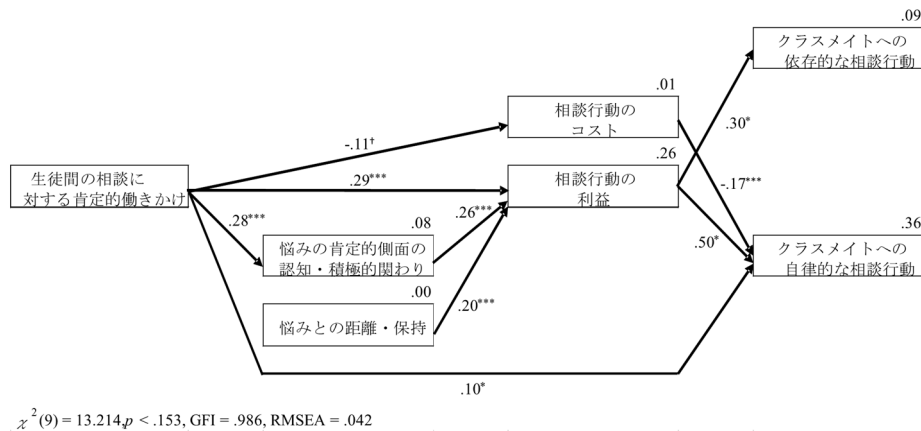
分析の結果、教師への相談を促す働きかけや生徒同士の相談を促す働きかけは、悩むこと自体への価値認知と相談行動の価値認知を高め、相談行動のコスト認知を低めることが明らかになった。相談行動の価値認知と教師への相談および生徒同士の相談を促す働きかけが自律的な相談行動を促進することも示された。教師と生徒の日常的な関わりは生徒の相談行動を促進するとともに、生徒自身の悩みへの向き合い方や相談行動に対する考え方も適応的なものにする事が示唆された。一方、相談行動の価値認知とコスト認知、教師への相談を促す働きかけは教師への依存的な相談行動も促進することが示された。教師への相談を促すだけでは、生徒の依存性を高めることも示唆された。今回の結果が学習面の相談行動の場合には同様の結果が得られるのか、今後さらなる検討が必要と考えられた。

Figure 1
教師への自律的・依存的な相談行動への影響



$$\chi^2(6) = 7.741, p < .258, GFI = .992, RMSEA = .033$$

Figure 2
生徒間の自律的・依存的な相談行動への影響



以上より、本研究で着目した、教師への相談行動を促す働きかけと生徒間の相談を促す働きかけは、生徒の相談に対する意識や相談行動に一定の影響をもつものといえる。教師と生徒との日常的な関わりを通して相談に対する意識を肯定的なものに変容させ、そうして教師に相談しやすい、生徒同士で相談しやすくしていくという、学級づくりにも有用な知見であるといえる。また、コロナ禍であったからこそ、研究知見を学校現場で活かしてもらえよう、調査協力校では教員研修会として研究結果の報告を行った。一方で、コロナ禍であったからこそその研究結果であることも推測されるため、本研究の結果の解釈は慎重にしなければならないと考えられる。

学習面の悩みや問題と心理面の悩みや問題それぞれに対する相談に対する意識や相談行動の相互影響過程については、調査の実施まで達することができなかったため、今後実施に向けて検討をしていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 後藤綾文・南学	4. 巻 73
2. 論文標題 いじめ被害を見聞きした第三者による 教師への援助要請行動を抑制する要因の探索的検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 三重大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 125-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Akamatsu Daisuke & Goto Ayafumi	4. 巻 1
2. 論文標題 Cluster analysis of failure beliefs among Japanese junior high school students: Perspectives from "failure prevention" to "failure promotion"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Information and Technology in Education and Learning	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 後藤綾文 企画代表者：本田 真大、企画者：永井 智、話題提供者：本田 真大、後藤 綾文、杉岡 千宏、水野 治久、指定討論者：岡田 涼、木村 真人、司会者：飯田 敏晴	
2. 発表標題 小学生の援助要請における家庭や学校の役割	
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会	
4. 発表年 2022年	

1. 発表者名 Ayafumi Goto	
2. 発表標題 Interaction effect between parenting and teacher support on students' help-seeking behavior	
3. 学会等名 The 20th Biennial European Association for Research on Learning and Instruction Conference（国際学会）	
4. 発表年 2023年	

1. 発表者名 後藤綾文
2. 発表標題 児童の援助要請スキルに対する有能感と社会経済的地位の関連
3. 学会等名 東海心理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 赤松大輔・後藤綾文
2. 発表標題 中学生における失敗観プロフィールの検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 後藤綾文・赤松大輔
2. 発表標題 学業的援助要請における学業的・社会的有能感と教師の働きかけの交互作用効果
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------